

地方創生ワカモノ調査

グループインタビュー結果報告書

令和元年11月26日

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局

* 報告書内使用フォント「青色」は地方進学要因の説明
「赤色」は東京進学要因の説明、で使い分けてあります。

- **目的** グループインタビューを通じて、若者の大学進学時の進路決定の実態と、その後の居住地に対する意識を把握する事によって東京一極集中是正の取組検討するための基礎資料とすることを目的とする。
- **内容**
 - ・ 地方創生に関する若者の意識調査のため、グループインタビューを企画、実施する。
 - ・ 開催場所は、東京1カ所、地方3カ所(新潟県、愛知県、福岡県での実施)とする。
 - ・ 1カ所当たりの対象者は24名(4グループ)、インタビューの時間は2時間程度とする。
- **実施概要**

地域	対象者属性	日程案
地方の若者 新潟・愛知・福岡	A 地元に残った、大学生・専門学校生/ 男性・女性(各6名) B 東京の大学・専門学校進学を視野に入れて考えている 高校3年生/男性・女性(各6名)	新潟: 6月15・16日 福岡: 7月13・14日 愛知: 8月03・04日
東京の若者	C 地方出身の大学2-3年生/男性・女性(各6名) D 東京出身の高校3年生/男性・女性(各6名)	大学生: 6月29日 高校生: 6月30日

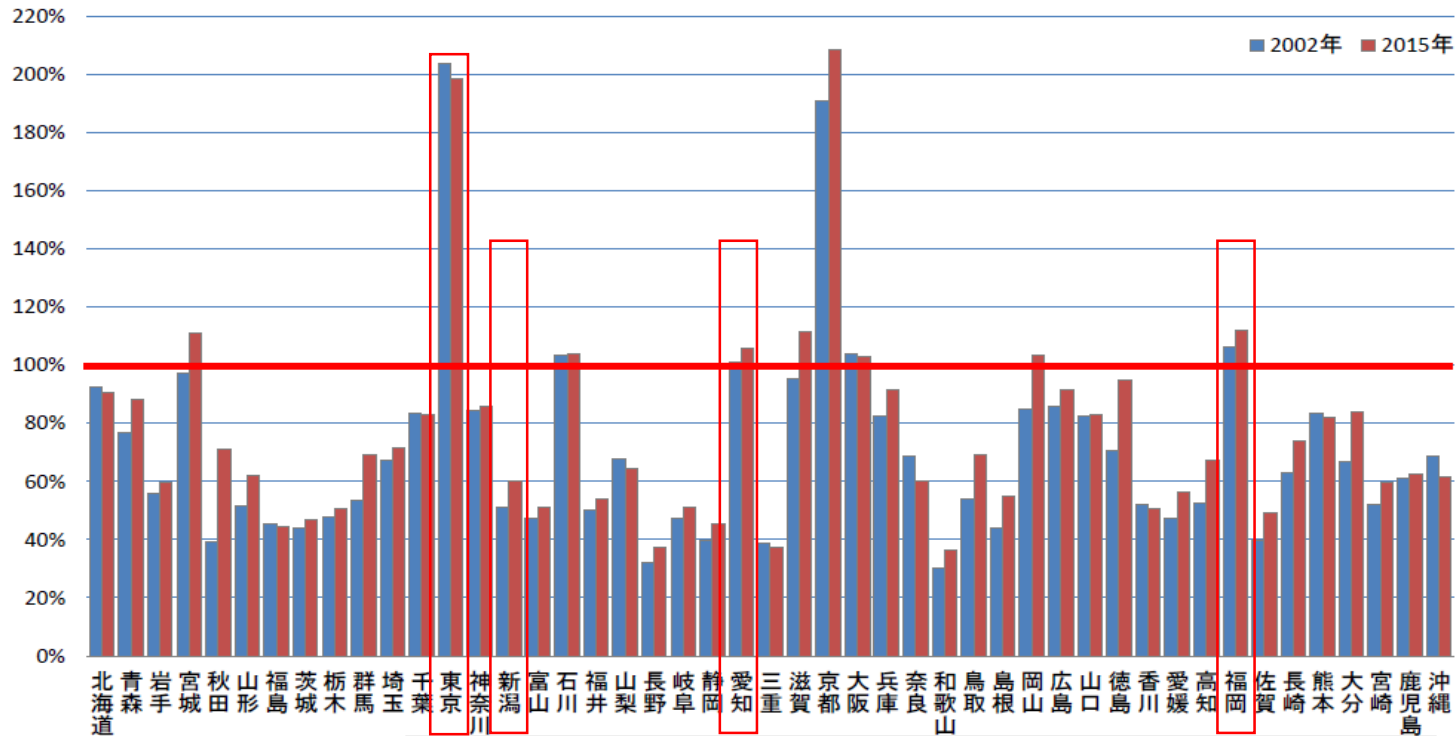
参考値：今回調査実施エリアにおける大学進学者収容力

■平成29年度 まち・ひと・しごと創生本部「東京一極集中の現状について」より

今回調査を実施した4地区では東京が約200%で全国の平均を大きく上回っている。一方、愛知と福岡はおおよそ100%で均衡。新潟は収容力が60%にとどまっている。

都道府県別大学進学者収容力の変化

○ 東京都及び京都府の大学進学者収容力が200%程度と突出しており、これに続くグループ(愛知県、大阪府等)は100%から110%程度であり、それ以外は100%を切っており、特に長野県、三重県、和歌山県は40%を切っている。



○大学進学者収容力=(各県の大学入学定員/各県に所在する高校の卒業者のうち大学進学者の数)×100

【出典】○大学入学定員数…文部科学省調べ ○大学進学者数…文部科学省「学校基本統計」

主な調査項目は以下の通り

- 1 地元に対する意識**： 流出入の背景にある地域の特性を、若者たちはどのように意識しているのか
- 2 進学先の選定プロセス**： 大学や専門学校はどのように選ばれているのか、居住地についてどう考えているのか
 - ・ 地元定着の場合と、東京への流出のパターンではどのような違いがあるのか
 - ・ 東京の高校生は、地方をどの程度視野に入れて進路を検討しているのか
- 3 進学先の選定要因**： 東京進学と地方進学を加速する要因はそれぞれどのようなことか
- 4 就職以降の居住地についての意向**：
就職や、結婚・子育て、その先にある親の介護を視野に入れた時、若者はどこで暮らすことを考えているのか
- 5 広報・コミュニケーションに対する評価**：
 - ・ 日本の人口減少や東京一極集中の問題を、どのように伝えればよいのか
 - ・ 自分事化してもらうためにはどのように伝えればよいのか、どうすれば行動へと誘引できるのか

1 流出入の背景にある地域の特性を、高校生や大学生・専門学校生はどのように意識しているのか

若者たちは自分が生まれ育った地域をどんなイメージでとらえているのだろうか



若者たちにも「郷土愛」のような意識はあるのか
これからも「住み続けたい場所」として評価されているのか

- 新潟・福岡・名古屋では、いずれも「自分たちの住む地域は、東京に比べて住みやすい」と評価されており、愛着が持たれている。
- これに対して東京は、ヒト・モノ・情報のすべてに大きな集積があり、大学や専門学校の選択肢も豊富で、就職にも有利であると考えられている。

-
- | | |
|----|--|
| 新潟 | ■ 自然環境に恵まれた住みやすい地域として愛着が持たれているが、交通インフラなどの 利便性には東京との大きな格差が感じられている。 |
| 福岡 | ■ 福岡は都会としての利便性を備えているだけでなく、自然環境にも恵まれた住みやすい 場所であると認識されている。 |
| 愛知 | ■ 名古屋は「ほどよく住みやすい街」として愛着が持たれている。ただし、若者にとっては遊ぶ場所がなく、刺激に乏しい面白みのない地域、というイメージが持たれている。 |
| 東京 | ■ 東京はヒト・モノ・情報のすべてに大きな集積があり、多様性に富んでいる。
■ 大学や専門学校の選択肢が豊富で、企業が集中していることから就職にも有利であると考えられている。 |

2

大学や専門学校の選定プロセスはどのように行われているのか

- 地元定着の場合と、東京への流出のパターンではどのような違いがあるのか

高校生は高校の3年間でどのように過ごし、
いつ、どのようなタイミングで進学先を決めているのだろうか？

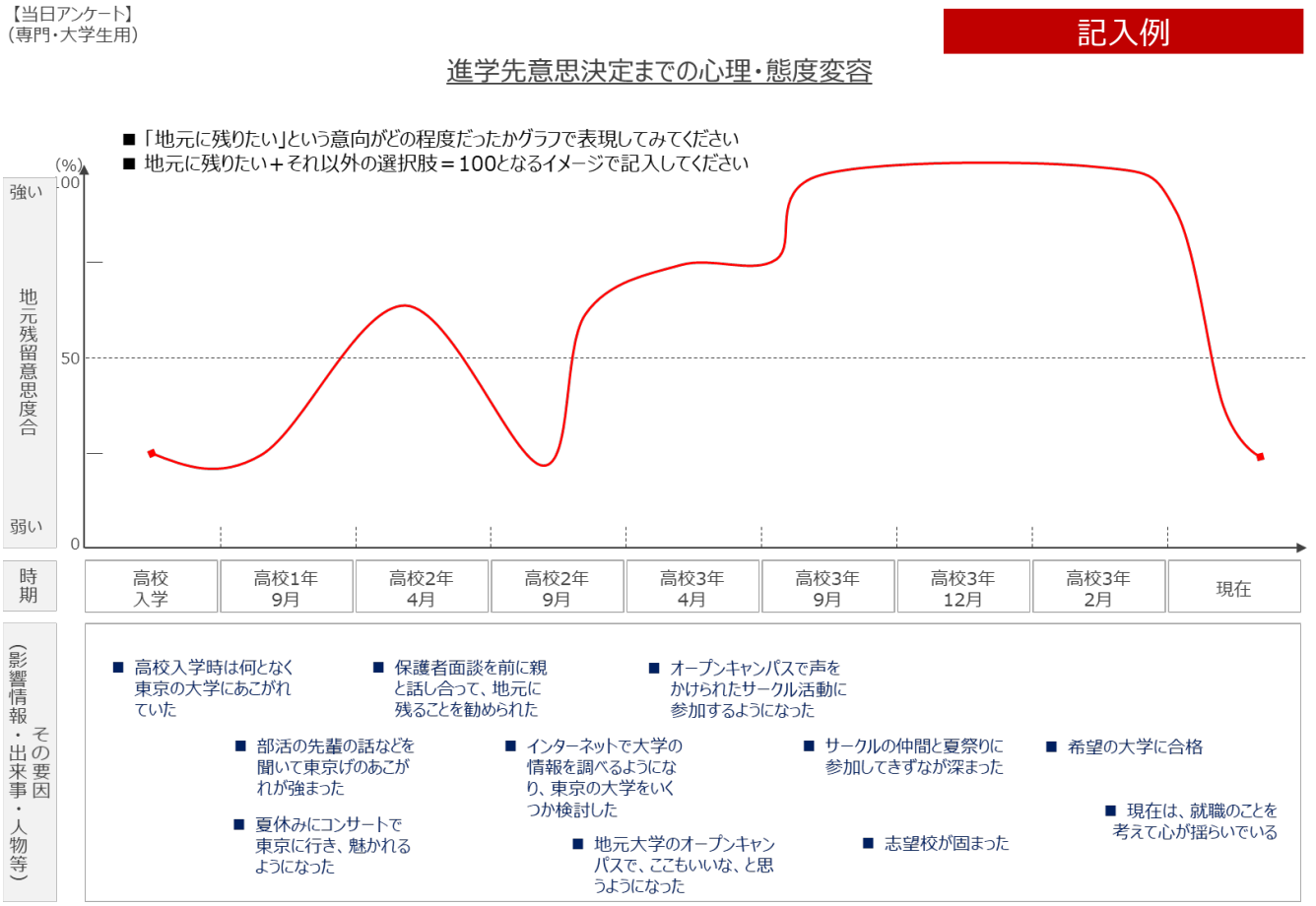


地元で進学する場合と、地方から東京へ進学する場合、
そして東京の高校生に違いはあるのだろうか？

2

大学や専門学校の選定プロセスはどのように行われているのか

- 地元定着の場合と、東京への流出のパターンではどのような違いがあるのか

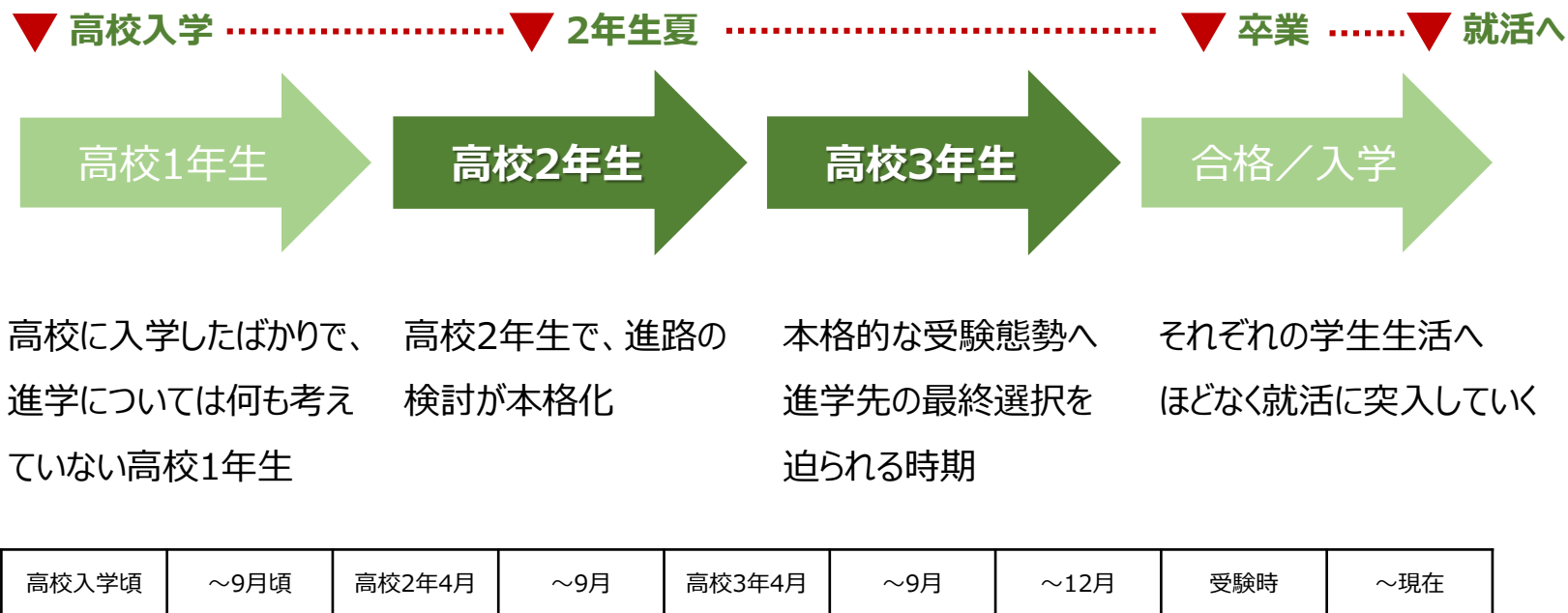


上に行くほど
地元（地方）への居住意向
が高い



下に行くほど
地元以外への居住意向
が高い

- 進路検討のプロセスには全国共通のパターンが存在していた。
- 特に重要な局面は高校2年生の夏と高校3年の秋、その前後で大きな意識の変化があり、進学先が絞り込まれていく。



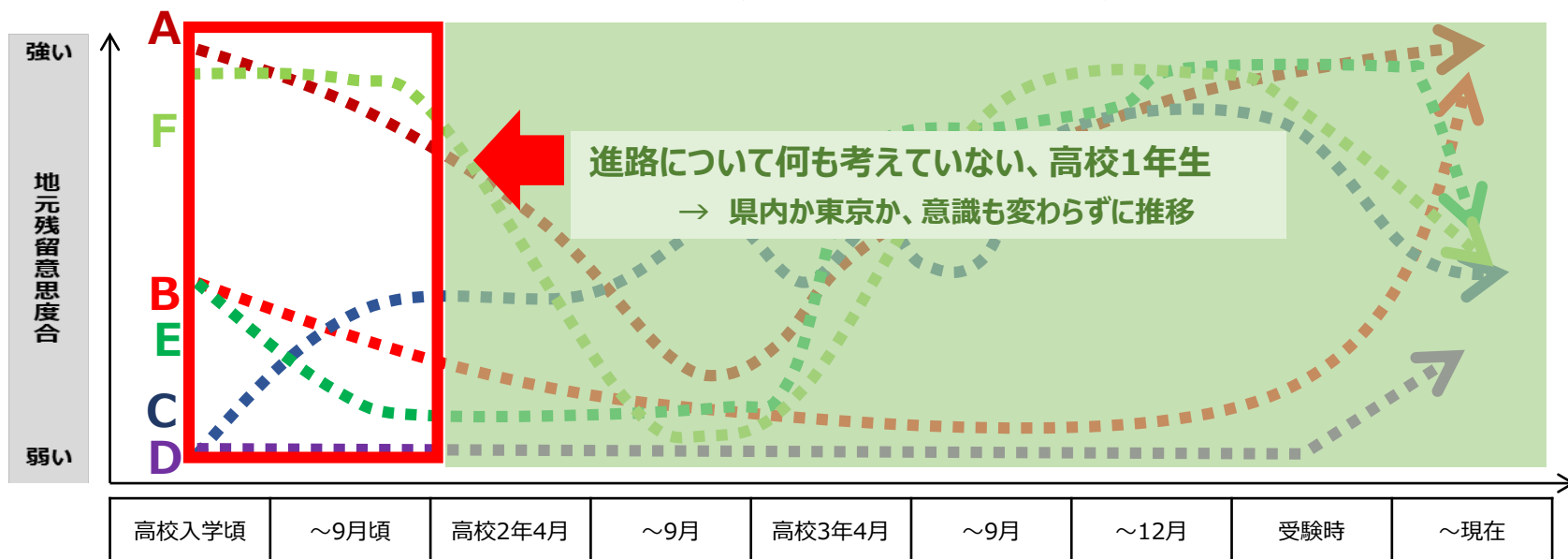
新潟調査

地元
女子大生・専門学校生
グループ

■ 進路選択の典型的なパターン／新潟の大学生女子の場合

進路の検討が本格化する高校2年生で東京志向が強まり
高校3年次に地元大学へと進路変更をしている。

※下図のローカルマインドバロメーターは上に行くほど地元残留の志向が高く、下へ行くほど、東京など地元以外への進学の意味が強いことを示している



高校1年生の間は
大きな変動はない

高校2年生で東京
志向が進む

一旦、東京志向に傾いた後、
地元へと揺り戻しが起こっている

ただし、就職については
再び東京志向を強める者も

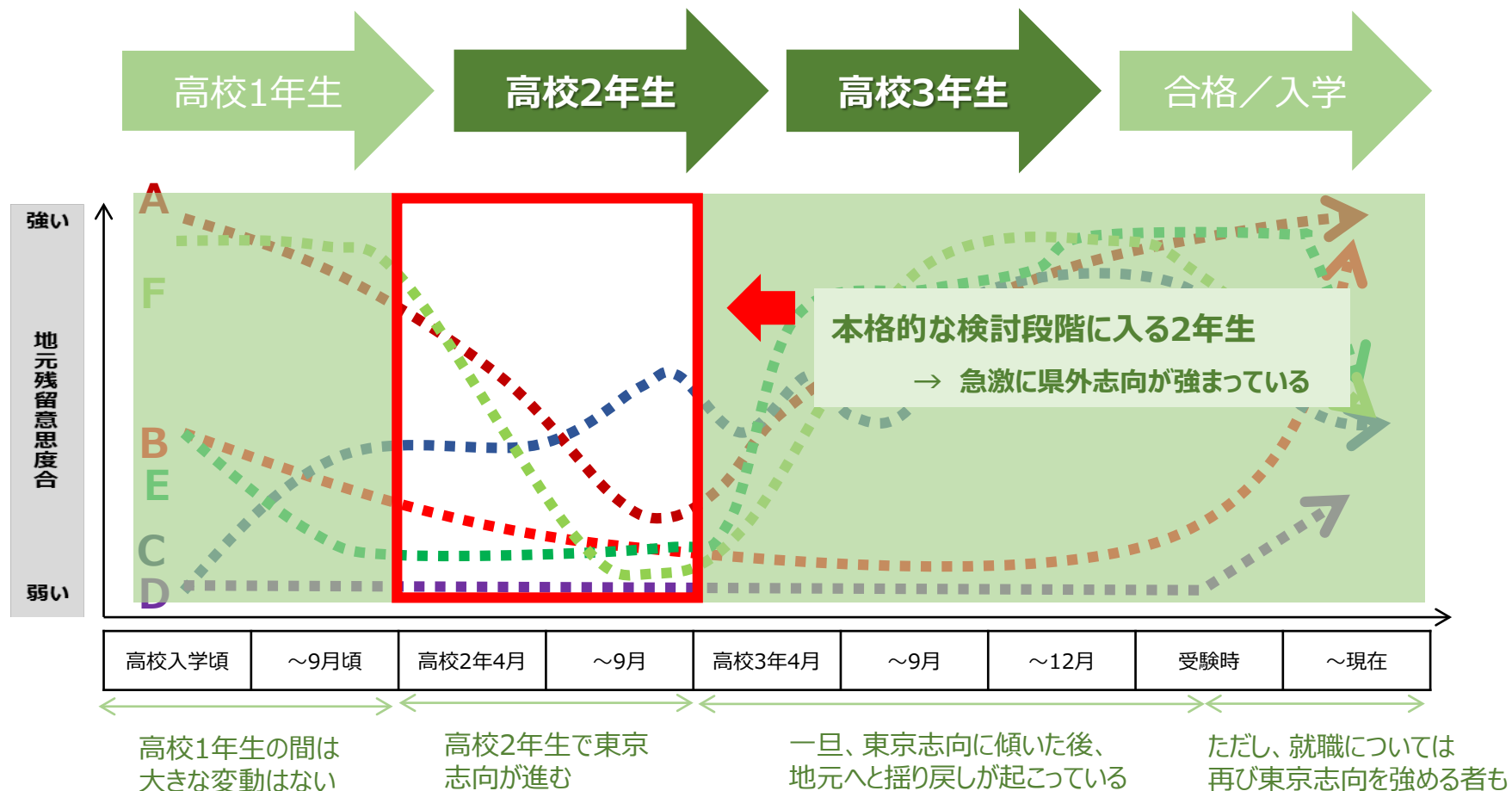
■ 進学先選定プロセス：地元の大学・専門学校に進学する場合

新潟調査

地元
女子大生・専門学校生
グループ

■ 進路選択の典型的なパターン／新潟の大学生女子の場合

進路の検討が本格化する高校2年生で東京志向が強まり
高校3年次に地元大学へと進路変更をしている。



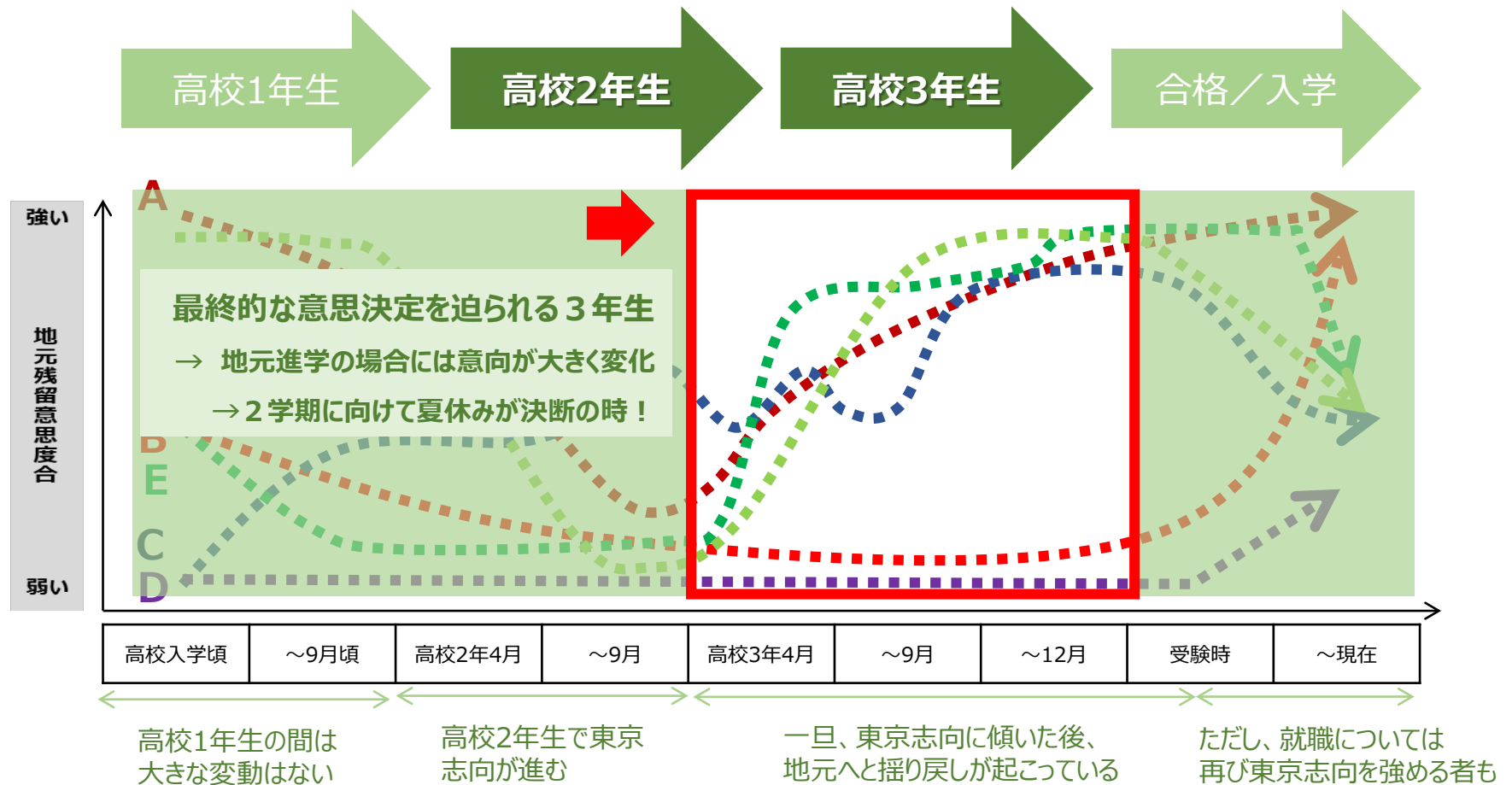
■ 進学先選定プロセス：地元の大学・専門学校に進学する場合

新潟調査

地元
女子大生・専門学校生
グループ

■ 進路選択の典型的なパターン／新潟の大学生女子の場合

進路の検討が本格化する高校2年生で東京志向が強まり
高校3年次に地元大学へと進路変更をしている。



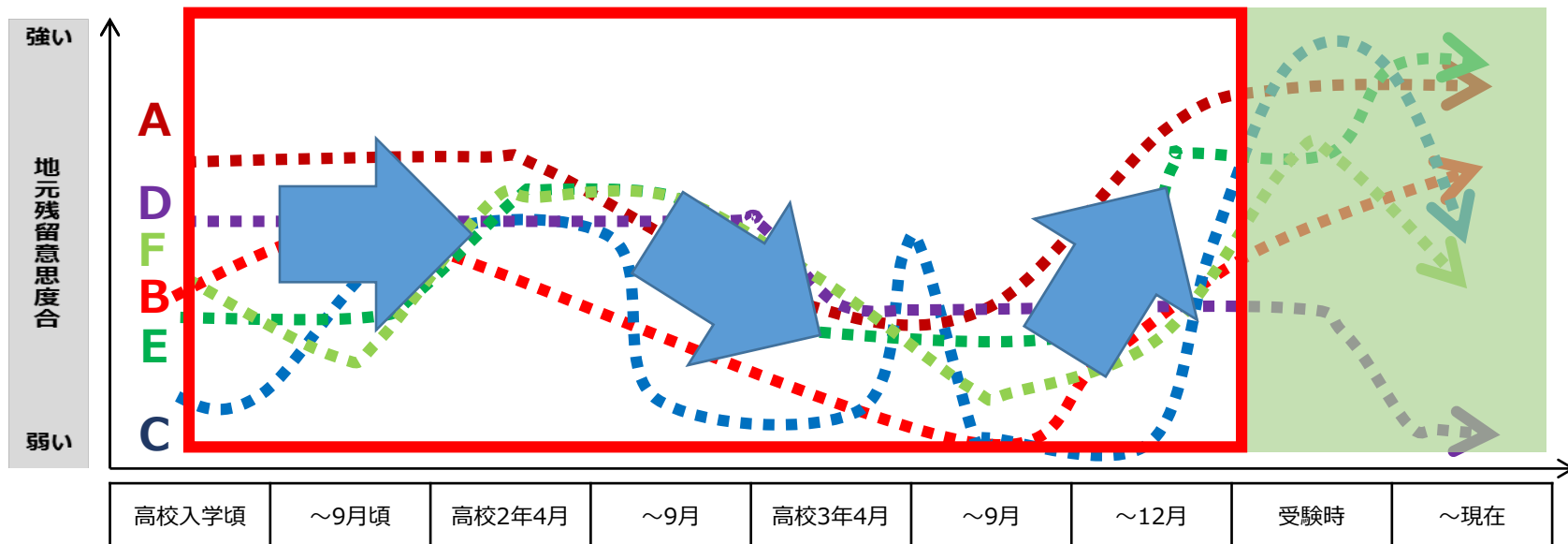
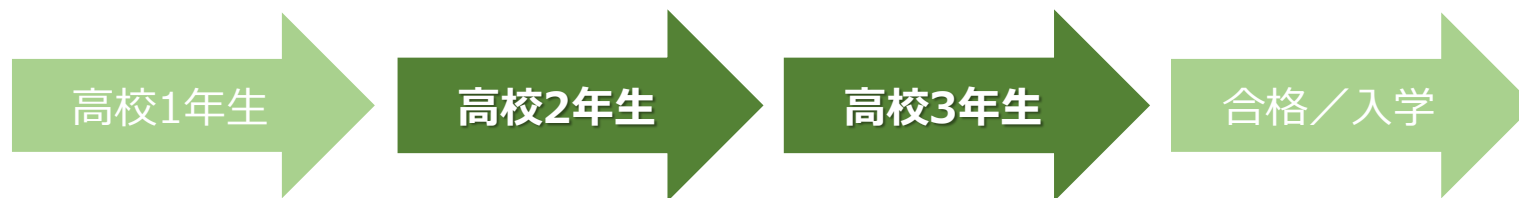
■ 進学先選定プロセス：地元の大学・専門学校に進学する場合

新潟調査

地元
男子大生・専門学校生
グループ

■ 新潟の大学生男子の場合

男子の場合にも同様に、進路の検討が本格化する高校2年生で東京志向が強まり、高校3年次に地元大学へと進路変更をしている。



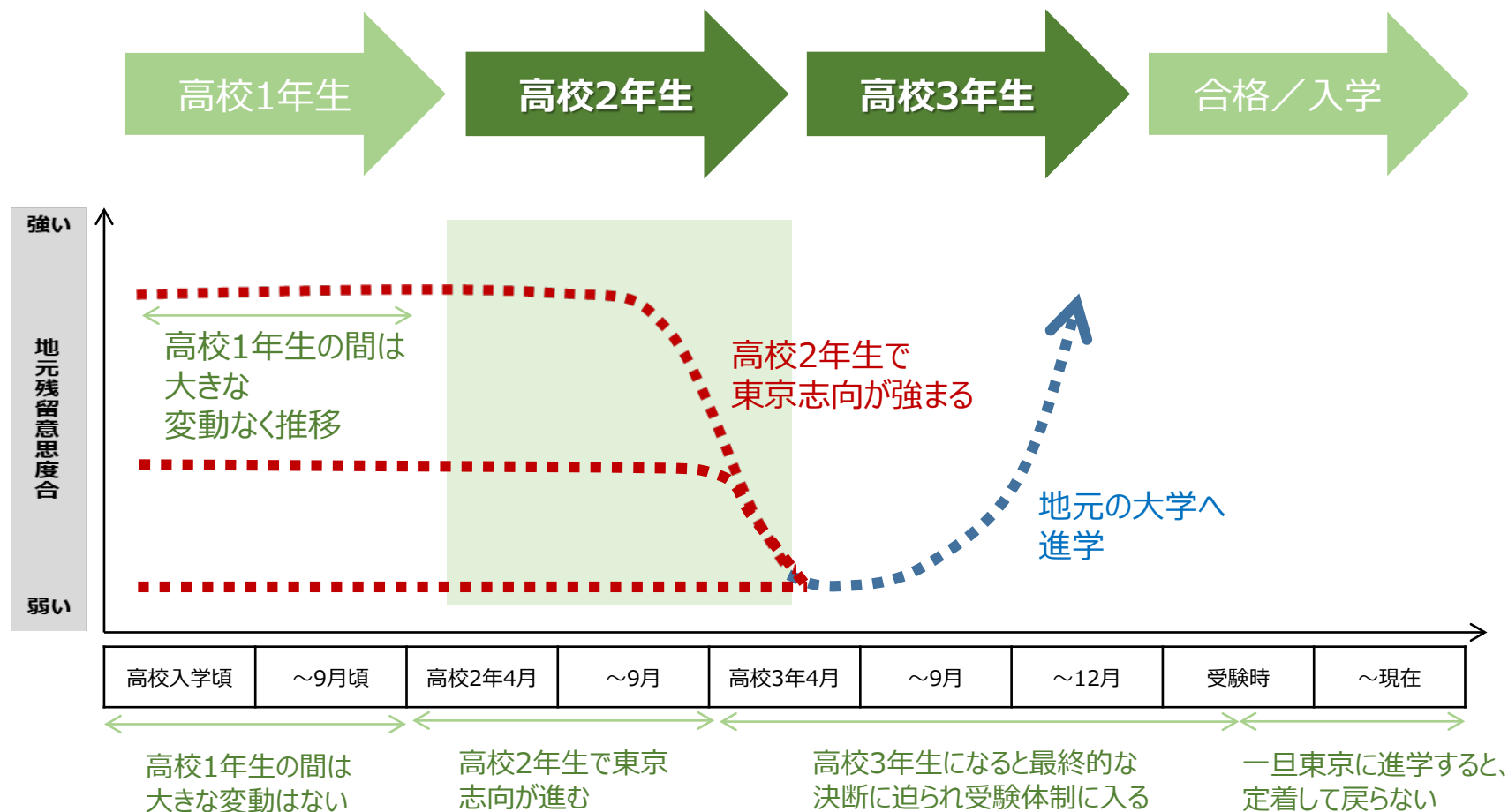
高校1年生の間は
大きな変動はない

高校2年生で東京
志向が進む

一旦、東京志向に傾いた後、
地元へと揺り戻しが起こっている

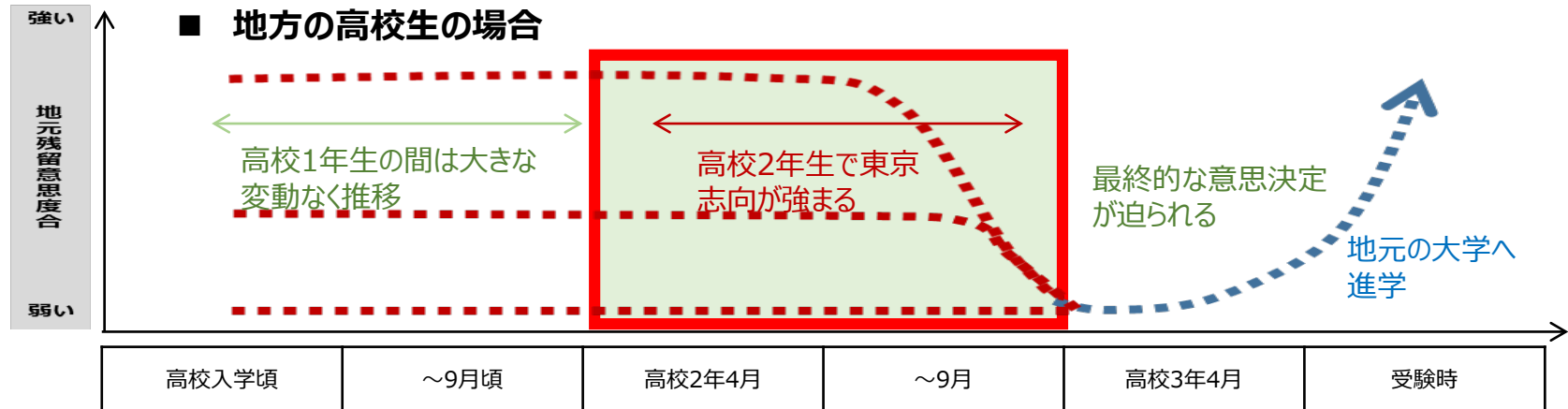
ただし、就職については
再び東京志向を強める者も

- 新潟だけでなく、福岡、名古屋でも、進路選択のパターンは共通。高校2年生で東京の大学への意向を強め、その後、高校3年生で志望校を地元大学に変更している。
- 高校生のグループでも高校3年生の夏までのプロセスは共通のパターンを描いている。



■ 進学先選定プロセス：地元の大学・専門学校に進学する場合

- 心の準備がないままに、進路の選択が本格化することで、偏差値主体の大学選びが始まり、その結果一気に東京志向が強まっていく。



東京志向が加速するタイミングで何が起きているのか：主要な発言

■ 情報収集が本格化する

- ネットやSNSで東京や他県の情報を調べるようになった：新潟男子
- 情報収集して、福岡にはない学部・学科が東京にはあることを知り、東京に興味を持つようになった：福岡女子

■ オープンキャンパスや旅行がきっかけで憧れが強まる

- オープンキャンパスがきっかけで、東京への憧れが強まった：新潟女子
- 学校行事の東京研修をきっかけに東京への進学を考えるようになった：福岡男子

■ 模試の結果から、偏差値をモノサシにした大学選びが始まる

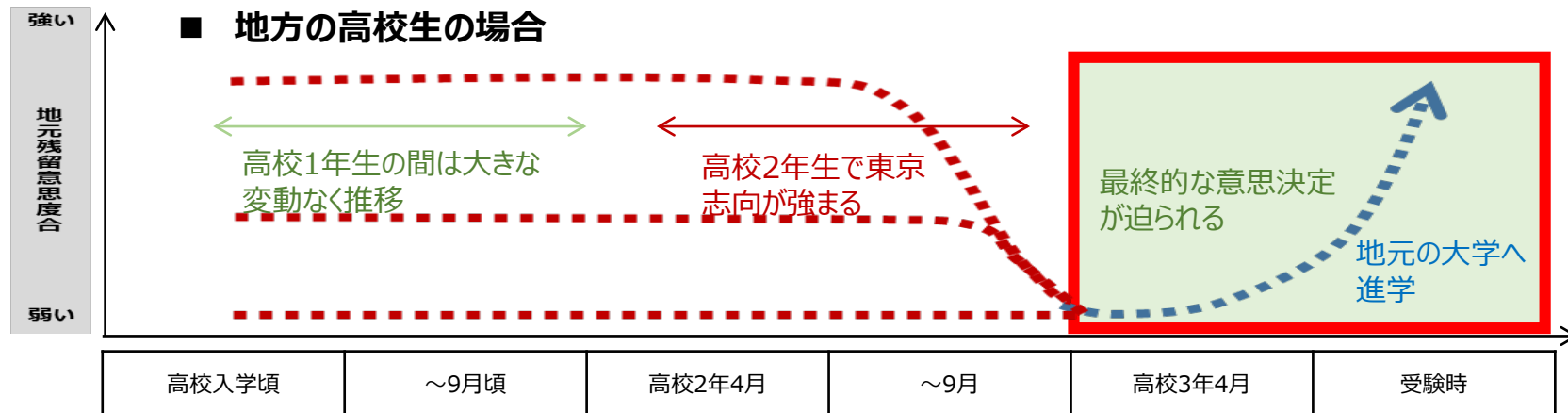
- 模試が始まったのをきっかけに志望校の検討を始めた：熊本男子
- 模試の成績が思ったより良かったので、東京の大学にも志望校を広げて考えるようになった：名古屋男子

■ 友人や先輩と一緒に進学について会話するようになる

- 塾の仲間と東京の大学を見に行き、東京の大学に興味を持つようになった：新潟男子
- 東京に進学した先輩と話して東京に憧れるようになった：名古屋女子

■ 進学先選定プロセス：地元の大学・専門学校に進学する場合

- 最終的な決断を迫られる高校3年次。偏差値だけでなく、家計の負担など、様々な現実と向き合いながら東京進学をあきらめ、地元進学への揺り戻しがおこっている。



地元志向に揺り戻すタイミングで何が起きているのか：主要な発言

■ 偏差値の現実を見て

- 模試で成績が上がらなかった：新潟男子
- 自分の学力や友人の動向を見て判断した：福岡女子
- 学力が足らず県内に決定した：名古屋男子

■ 経済的負担を考慮する

- 経済的な負担を考えて、実家から通った方がいいと思った：名古屋女子
- 東京の生活や経済的負担で悩んだ：新潟女子

■ 両親や先生と相談して決めた

- 両親と話し合い、地元進学を決められた：新潟女子
- 親の意向にしたがった：名古屋男子
- 学校の先生と相談した：福岡女子

■ 地元大学のオープンキャンパスに参加した

- 地元大学のオープンキャンパスに参加した：新潟女子、他

■ 進学先選定プロセス：東京に進学した地方出身者の場合

東京調査

地方出身
男子大生・専門学校生
グループ

■ 地方から東京に進学した男子大学生の場合

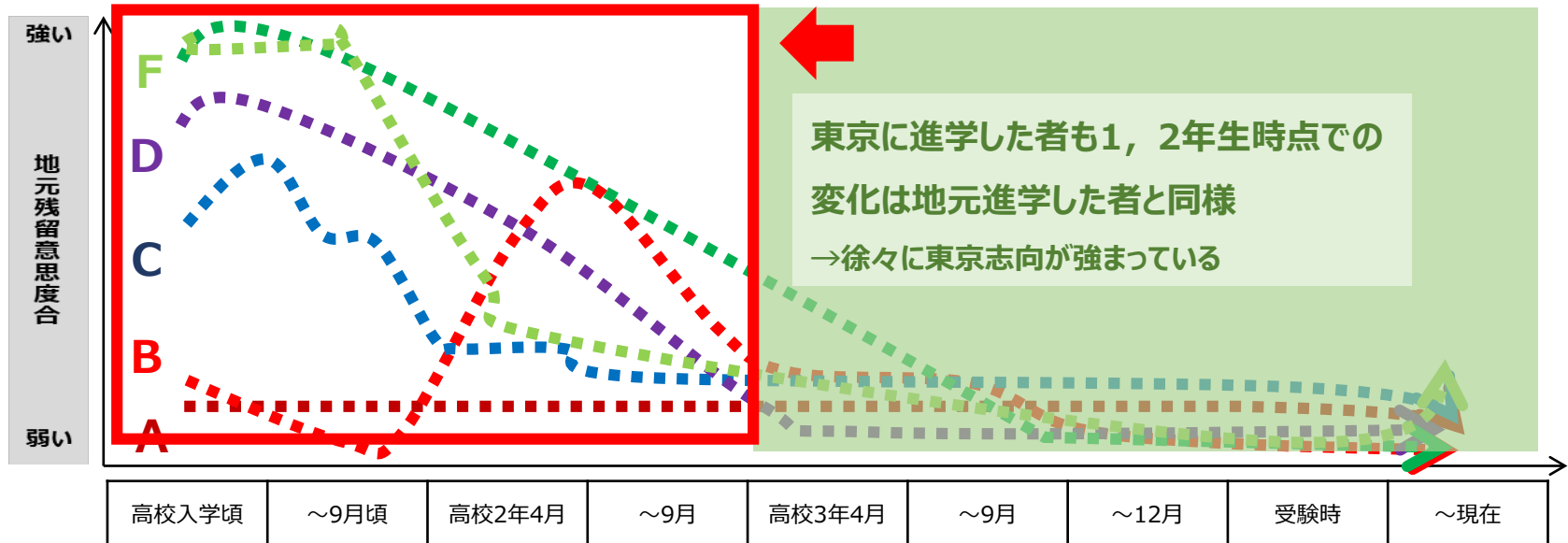
東京志向を強める高校2年生までの経過は地元進学と同様だが、徐々に東京志向を強め、東京への進学の意味を固めている。

高校1年生

高校2年生

高校3年生

合格/入学



高校1年生の間は
大きな変動はない

高校2年生で東京
志向が進む

高校3年生になると東京進学
の意思が固まり、受験を迎える

一旦東京に進学すると、
定着して戻らない

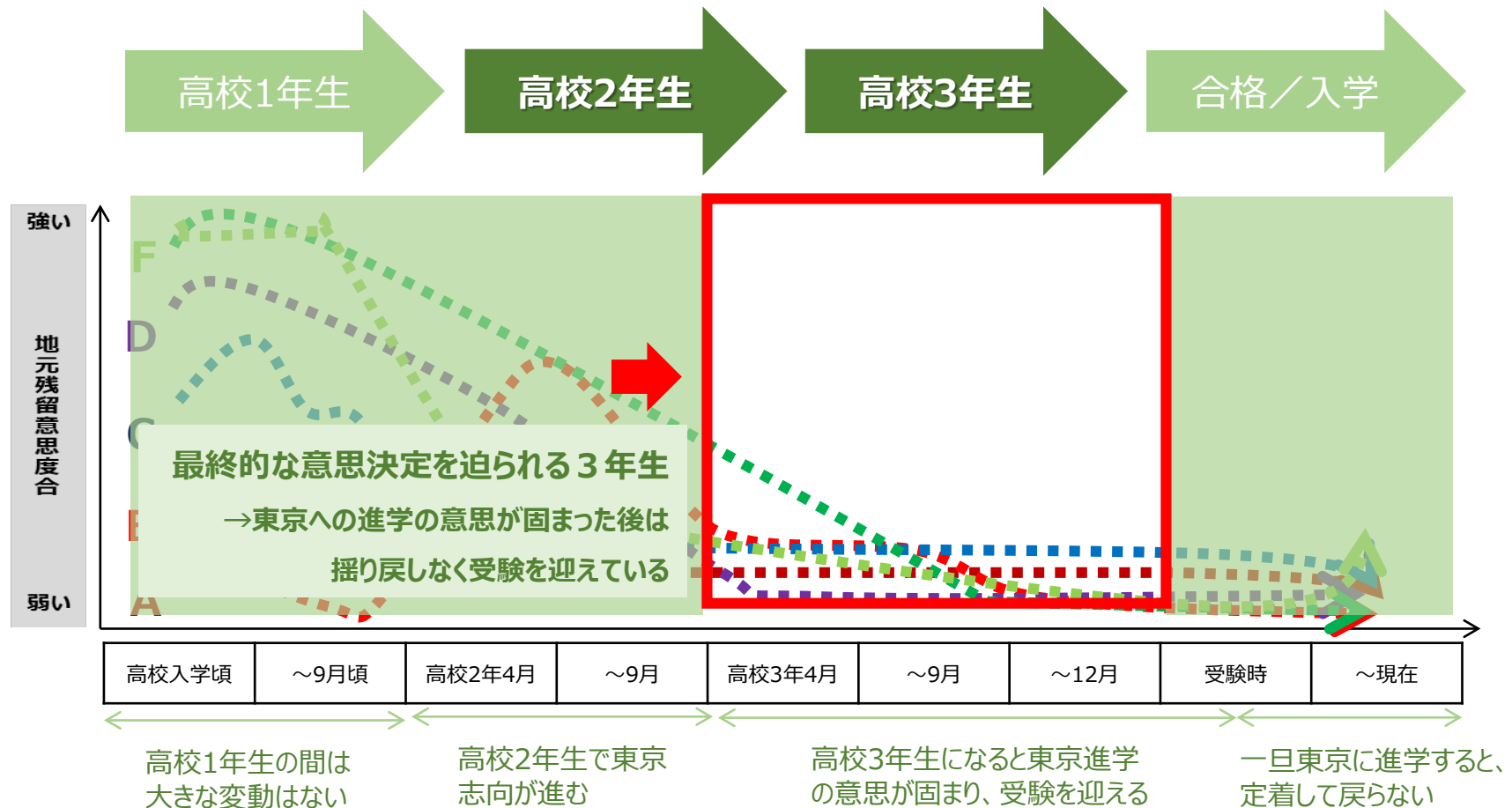
■ 進学先選定プロセス：東京に進学した地方出身者の場合

東京調査

地方出身
男子大生・専門学校生
グループ

■ 地方から東京に進学した男子大学生の場合

地方から東京に進学する場合、東京への進学の意味を固めた後、地元志向への揺り戻しなく受験を迎えている。



■ 進学先選定プロセス：東京に進学した地方出身者の場合

地方から東京に進学した者では、進学校であるだけでなく、親の寛容な態度や、東京にいる縁者の存在などが、東京進学へのハードルを低くしている。

親の勧め・寛容な態度

- 母親が東京の大学に通っていて、小さい頃から東京に行ったほうが経験としていいとずっと言われていた。反抗とかもなく、私も行けたら行きたいという感じだった。母は大学ではなく、東京がいいと言っていた。何でもできるし、いろんな経験ができると言っていた。：愛知県出身女子
- 両親は地元の出身だが、母は地元の大学で父は京都の大学に行っていた。ひとり暮らしをする良さも地元に残る良さもどちらも聞いていた。：新潟県出身女子。
- 両親の影響であんな風になっただけだと思っていた。：長野県出身男子

進学校であること・学校や塾の勧め

- 高校が半分くらい東京に進学する高校だったので、そんなに不安はなかった。東京への研修旅行があって、東京の大学を見たり、観光したりして、それを機に東京に行きたいと思うようになった。：福岡県出身男子
- 高校選びの時からいちばん東京に進学しているところにした。：愛知県出身男子
- 塾の先生からのアドバイスがほとんど東京に集中していたので、東京を意識するようになった。：福島県出身男子

東京の身寄り

- 叔母の家族、従兄弟の一家が今東京にいて、結構助けてもらっている。僕から連絡することはあまりないが、母が僕のことでも連絡してくれたりして、安心材料になっている。熊本県出身男子
- 母方の祖父母の兄弟たちが千葉、ディズニーランドの辺りにいたり、電車で1駅くらいのところに住んでいる親戚もいる。病気の時は、その人に聞くと医者場所を教えてください。自分がというよりは母が連絡したりする。新潟県出身男子
- 兄・姉が東京にいる。：長野県出身女子／熊本県出身女子

■ 進学先選定プロセス：東京出身の高校生の場合

東京調査

男子高校生グループ

東京の高校生の場合には、高校2年生になると地方の大学にも目を向けている。が、選択肢が東京周辺に多いことから、結局は東京周辺での進学に落ち着いている。ただし、国公立大学を志望する者についてはこのパターンから外れている。

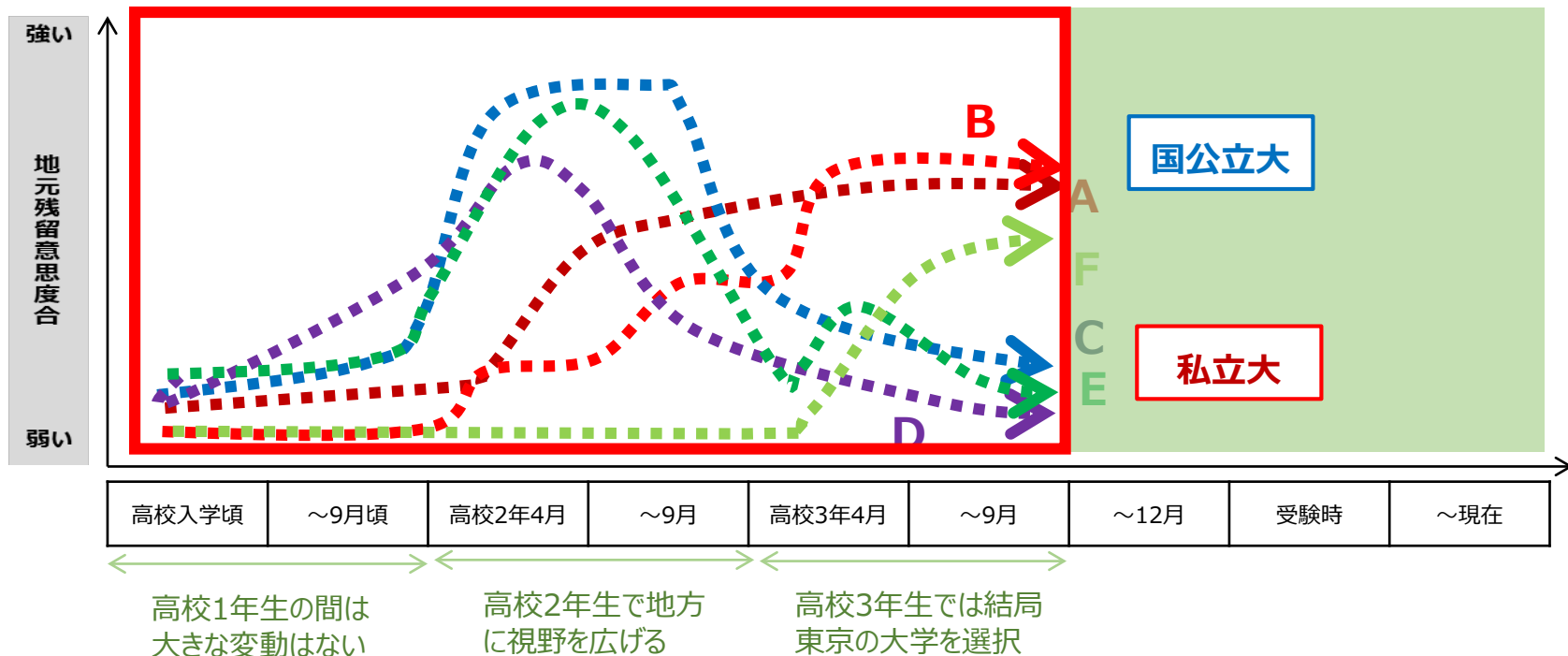
※下図のローカルマインドバロメーターは上に行くほど地方進学での意向が強く、下に行くほど、東京の大学への進学意向が強いことを示している。

高校1年生

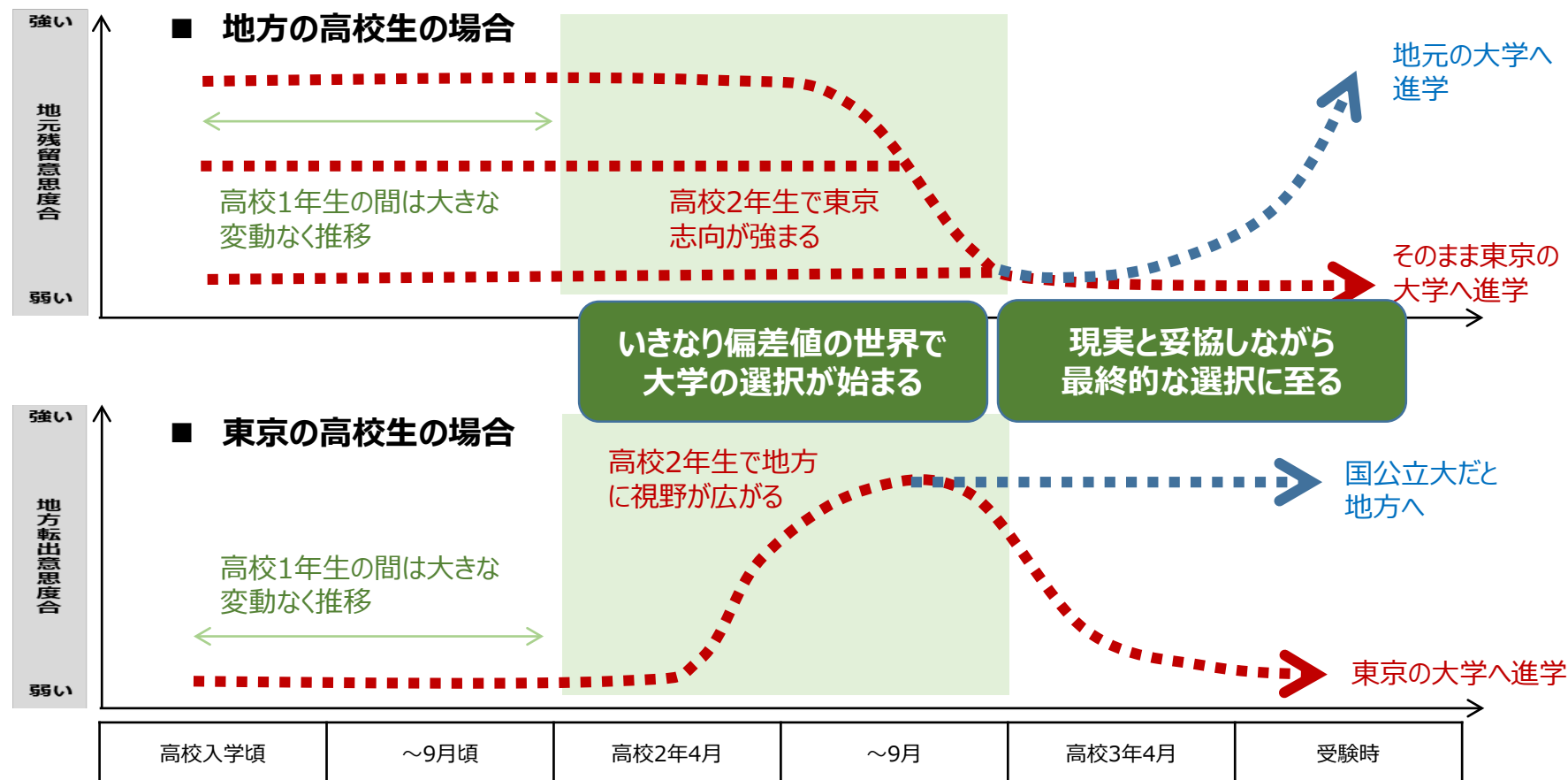
高校2年生

高校3年生

合格/入学



- 進路検討のプロセスはほぼ全国共通。
- 進路選択が本格化する高校2年生の夏から、地方の高校生は東京志向を強めていく。
- 高校3年生になると最終的な意思決定が迫られ、進路が分かれていく。



3 東京進学と地方進学を加速する要因は何か

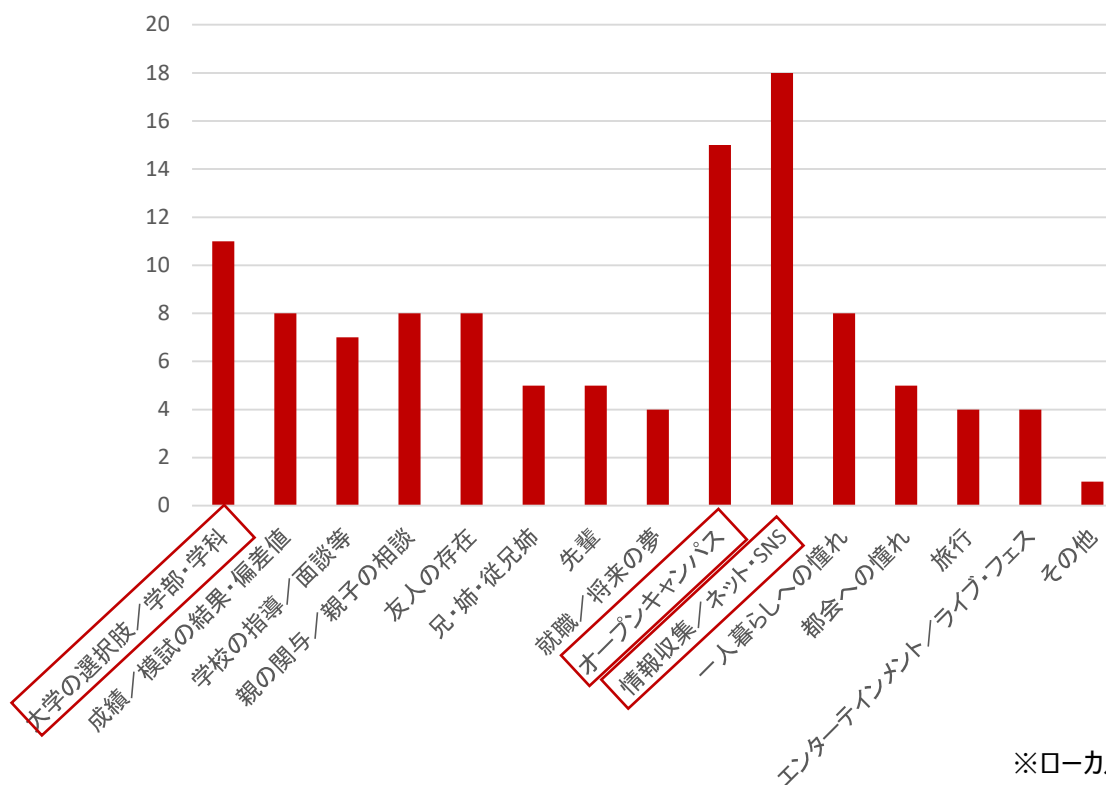
東京進学と地方進学
何がその分かれ目になっているのか



意思決定の背景に
どんなできごとやきっかけがあるのだろうか

- 東京志向を強めるタイミングで記述されたできごとを集計すると、**ネットなどで情報検索**を行いながら、**自分の成績と** 突合せ、**オープンキャンパス**で夢を膨らませて、東京の進学先を絞り込んでいく、といった実態が見えてくる。
- 偏差値中心の大学選びが、東京進学を加速させている。

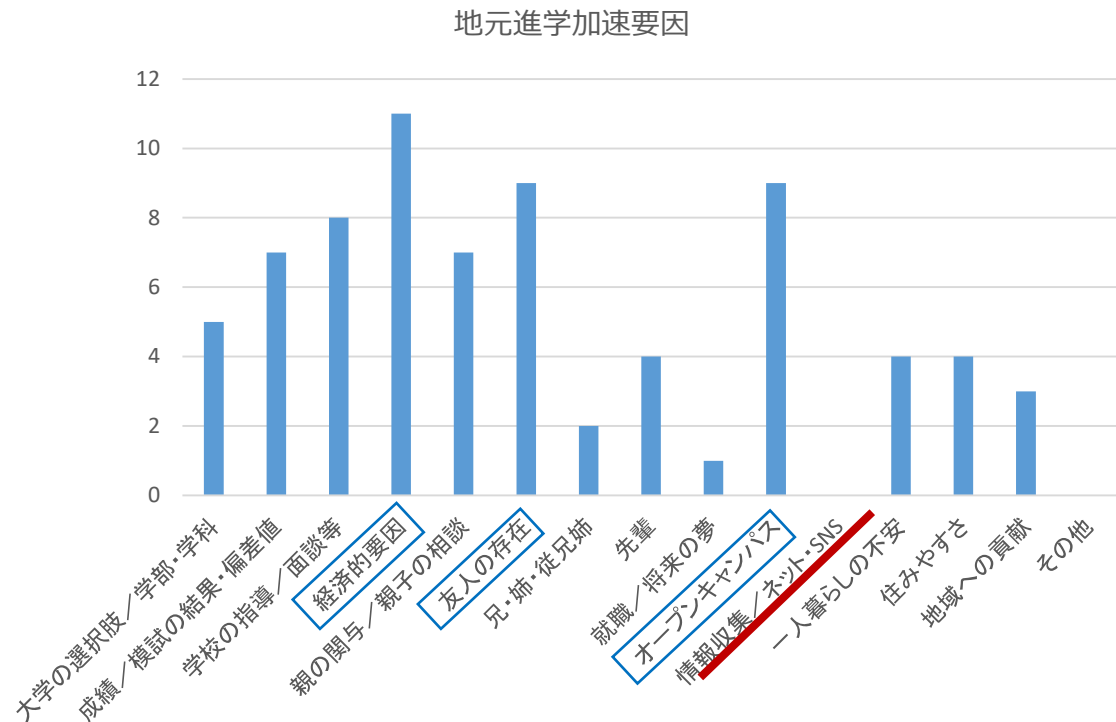
東京進学加速要因計



※ローカルマインドバロメーターの記述内容を集計

■ 進学先選定の背景要因：地元進学を加速する要因

- 地元志向を強めるタイミングでのできごとは、**経済的な要因**がトップだが、他には**友人の存在**、**地元大学のオープンキャンパス**などがあがっている。
- ネットなどの情報収集はあがっておらず、東京進学と様相は大きく異なっている。



※ローカルマインドバロメーターの記述内容を集計

東京進学 of 加速要因

- 大学や学部・学科の選択肢の多さ
- 親の承諾／勧め
- 東京の大学のオープンキャンパス
- ネット・SNSなどの情報収集
- 一人暮らしや都会への憧れ／都会への旅行
- 私立大／文系
- 学校（進学校の場合）・塾の指導
- 兄・姉・親戚などの身寄りがある
- 仕事の選択肢の多さ

- 自分にとってどんな生き方が幸せなのか、というモノサシがないままに、偏差値の世界に入っていくことで、大学が集中している東京へと若者は吸い寄せられていく。
- この過程に東京への旅行やオープンキャンパスが重なっていくことで、東京への憧れが広がっていく。

地元進学 of 加速要因

- 家計の状況や経済的負担の検討
- 地元の友人の存在
- 地元大学のオープンキャンパス
- 親・家族の存在
- 一人暮らしの不安
- 地元の住みやすさ
- 国公立大／理系
- 地域コミュニティとの関係

- 受験にいたる最終局面では、親の存在が急浮上し、経済的な負担感や自分の成績などを考慮しながら、東京進学をあきらめ、地元進学を決断する、というプロセスが明らかになった。
- 本人にとってはやや不本意ではあるが、この過程が地元定着を促すことになっている。

4

就職や、結婚・子育て、その先にある親の介護を視野に入れた時、若者はどこで暮らすことを考えているのか

就職について考えるとき

若者たちは将来どこで暮らすことを考えているのか



結婚や子育て、さらには親の介護など

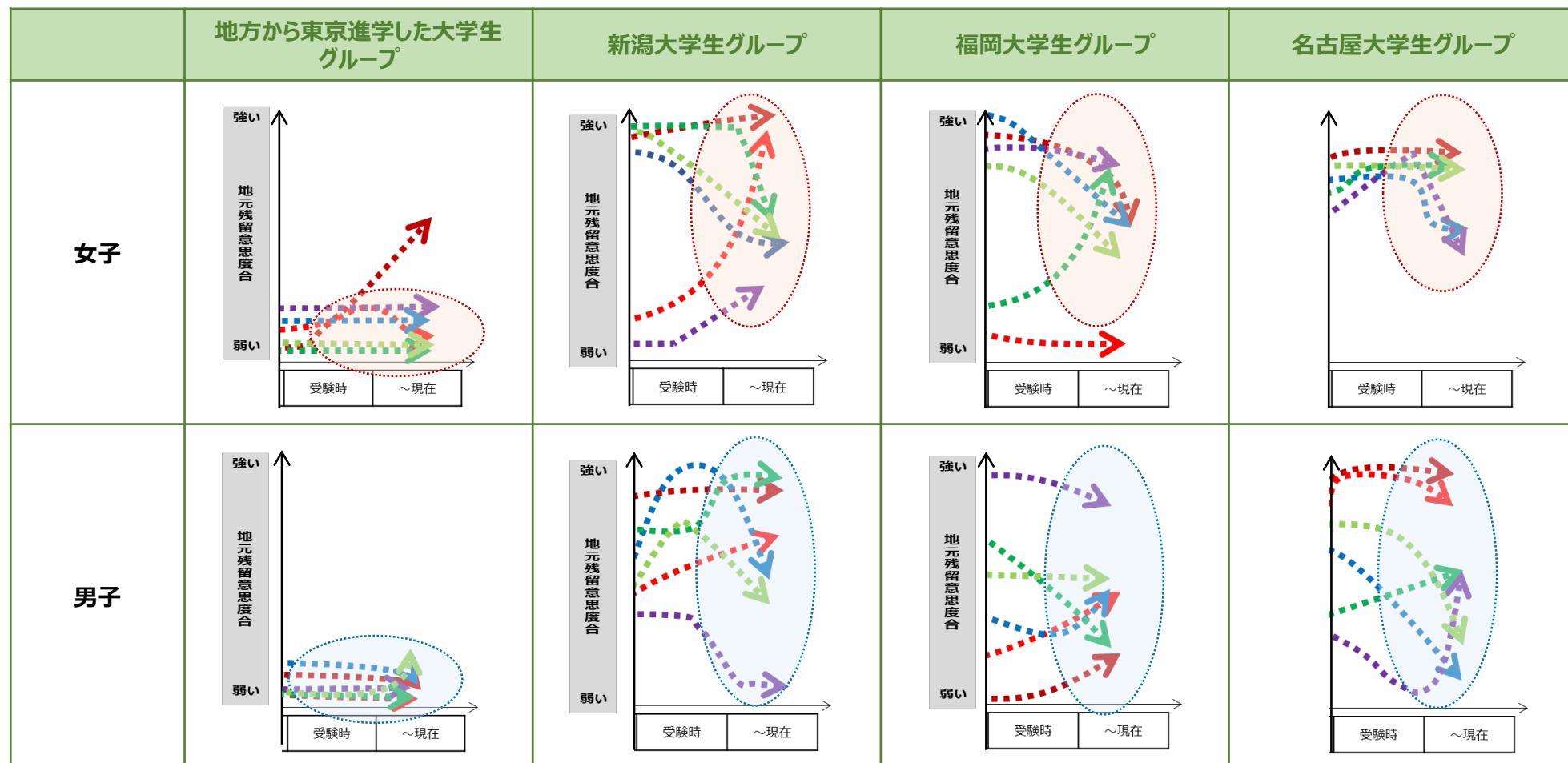
将来のライフイベントを考えるとき

若者たちはどこで暮らしているのがよいと考えているのか

■ 就職に向けての意識：若者はどこで就職することを考えているのか

下の図は、就職に向けてのローカルマインドを示したもので、上にいくほど地方での就職を意識することを示している。

- 地方から東京に進学した若者の多くはそのまま東京での就職を考えており、地元での就職は視界から外れている。
- 地元に進学した若者は比較的地元志向が強いが、それでも就職時には再び東京志向を強めている。



■ 就職に向けての意識： 就職・結婚・子育て。介護を考えた時、若者はどこで暮らすことを考えているのか

- 就職の段階では、東京や福岡の学生では東京での就職意向が高いことを示していた・
- 一方、結婚・子育て・介護を想定させてその時どこで暮らしているのが良いかを聞くと、どの地域でも地方が良いという回答が多くを占めた。

東京進学した
地方出身学生

- 就職は東京で、という者がほとんど
- 一旦東京へ出ると、地元に戻る選択は難しい

就職時は再び東京集中が強まる傾向

地元進学した
大学生

- 地元志向は比較的強いが、東京志向への揺り戻しも見られている
- 流動性が再び高まっている

結婚・子育て・介護
などのライフイベント
に地元への回帰の
チャンスが生じる

- 結婚や子育て・親の介護などのライフイベントを想定すると、地元居住への意向が高まる
- ひいては進学・就職時も長期の人生設計を織り込むのがよいのではないかとする者も多い

5

日本の人口減少や東京一極集中の問題を、どのように伝えればよいのか

- ・ 自分事化してもらうためにはどのように伝えればよいのか、どうすれば行動へと誘引できるのか

**日本の人口減少や東京一極集中の問題は
若者にどの程度理解されているのか**



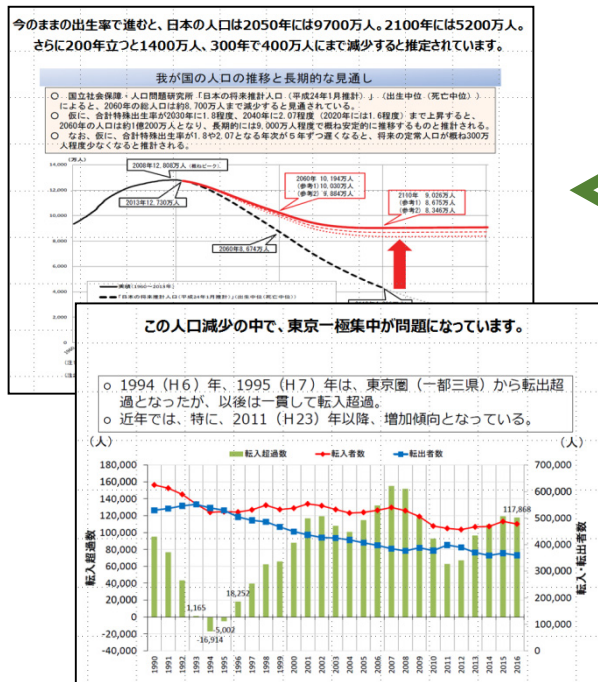
**今後自分事として受け止め、
意識の変化から行動へとつなげていくうえで
どのような伝え方や施策が有効なのだろうか**

5. 広報・コミュニケーションに対する評価

- 情報提供の方法では、自分の暮らしに関わるような、自分事化しやすい情報提供の方法に関心が集まっている。
- 今回のグループインタビューのように、将来の生き方について考える機会が地方に目を向けるきっかけになることが明らかになった。

■ 呈示資料①

人口減少や東京一極集中のグラフ等



■ 呈示資料②

子育て環境や暮らしやすさ等の都道府県ランキング

子育て環境のギャップ 資料2

○ 東京圏は、過度の人口の集中により、待機児童が多い、育児と仕事の両立といった課題を抱えている。

保育所待機児童数				育児している女性(05~14歳)の有業率				女性(05~14歳)の有業率(育児休業取得)			
都道府県	2016年	2015年	2014年	2016年	2015年	2014年	2013年	2016年	2015年	2014年	2013年
1 青森	0.2%	0.2%	0.2%	1	1	1	1	1	1	1	1
2 山形	0.2%	0.2%	0.2%	2	2	2	2	2	2	2	2
3 福島	0.2%	0.2%	0.2%	3	3	3	3	3	3	3	3
4 山梨	0.2%	0.2%	0.2%	4	4	4	4	4	4	4	4
5 長野	0.2%	0.2%	0.2%	5	5	5	5	5	5	5	5
6 新潟	0.2%	0.2%	0.2%	6	6	6	6	6	6	6	6
7 群馬	0.2%	0.2%	0.2%	7	7	7	7	7	7	7	7
8 栃木	0.2%	0.2%	0.2%	8	8	8	8	8	8	8	8
9 茨城	0.2%	0.2%	0.2%	9	9	9	9	9	9	9	9
10 群馬	0.2%	0.2%	0.2%	10	10	10	10	10	10	10	10
11 東京都	1.1%	1.1%	1.1%	11	11	11	11	11	11	11	11
12 千葉県	0.2%	0.2%	0.2%	12	12	12	12	12	12	12	12
13 埼玉県	0.2%	0.2%	0.2%	13	13	13	13	13	13	13	13
14 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	14	14	14	14	14	14	14	14
15 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	15	15	15	15	15	15	15	15
16 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	16	16	16	16	16	16	16	16
17 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	17	17	17	17	17	17	17	17
18 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	18	18	18	18	18	18	18	18
19 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	19	19	19	19	19	19	19	19
20 東京都	0.2%	0.2%	0.2%	20	20	20	20	20	20	20	20

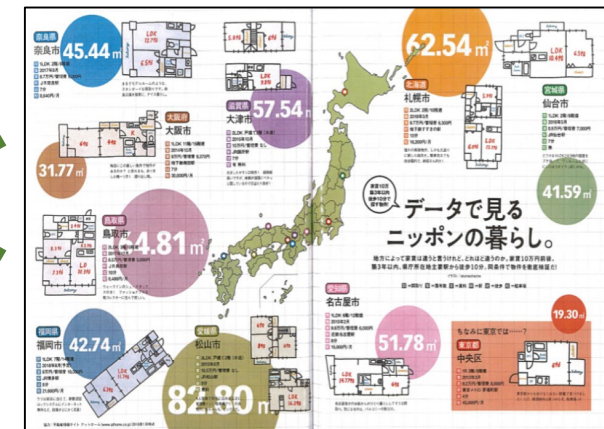
都市圏が抱える課題（暮らしやすさの辺り） 資料2

○ 東京圏は、過度の人口集中に基づく通勤時間が長い、住宅価格が高いといった課題を抱えている。
 ○ 通勤時間を含む仕事に関する時間全体を見ても、東京圏は長く、余裕が少ないことが見て取れる。

一日当たりの通勤等時間(平日)			一宅当たり延べ通勤(持家)			1日当たり仕事入り通勤時間(時)		
都道府県	時間(分)	順位	都道府県	時間(分)	順位	都道府県	時間(分)	順位
1 東京都	57	1	1 東京都	173	1	1 東京都	9	1
2 東京都	57	2	2 東京都	173	2	2 東京都	9	2
3 東京都	57	3	3 東京都	173	3	3 東京都	9	3
4 東京都	57	4	4 東京都	173	4	4 東京都	9	4
5 東京都	57	5	5 東京都	173	5	5 東京都	9	5
6 東京都	57	6	6 東京都	173	6	6 東京都	9	6
7 東京都	57	7	7 東京都	173	7	7 東京都	9	7
8 東京都	57	8	8 東京都	173	8	8 東京都	9	8
9 東京都	57	9	9 東京都	173	9	9 東京都	9	9
10 東京都	57	10	10 東京都	173	10	10 東京都	9	10
11 東京都	57	11	11 東京都	173	11	11 東京都	9	11
12 東京都	57	12	12 東京都	173	12	12 東京都	9	12
13 東京都	57	13	13 東京都	173	13	13 東京都	9	13
14 東京都	57	14	14 東京都	173	14	14 東京都	9	14
15 東京都	57	15	15 東京都	173	15	15 東京都	9	15
16 東京都	57	16	16 東京都	173	16	16 東京都	9	16
17 東京都	57	17	17 東京都	173	17	17 東京都	9	17
18 東京都	57	18	18 東京都	173	18	18 東京都	9	18
19 東京都	57	19	19 東京都	173	19	19 東京都	9	19
20 東京都	57	20	20 東京都	173	20	20 東京都	9	20

■ 呈示資料③

家賃10万円で借りられる物件の広さ等のビジュアルでの比較



暮らしぶりの実感値が伝わる情報提供の方法ほど評価が高い

③は地方学生が地元のよさを見直すだけでなく、東京の高校生が地方の暮らしやすさに気づききっかけにもなっている

1

流出入の背景にある地域の特性を、高校生や大学生・専門学校生はどのように意識しているのか

- 地方の学生にとって、東京は大学や専門学校の選択肢が多だけでなく、ヒト・モノ・情報のすべてが集積する憧れの都会、と考えられている。
- 新潟・福岡・名古屋のいずれの地域も「東京に比べて住みやすい場所」と考えられている。

2

大学や専門学校の選定プロセスはどのように行われているのか

- 進学先の検討は高校2年生の夏頃から本格化し、選択肢を広げていく。
- 3年生になると受験に向けて志望校を絞り込んでいく。
- 高校2年生になると地方の高校生は東京の大学に目を向けるようになり、東京の高校生は地方の大学にも視野を広げている。
- 地元進学を決めた者の多くは、一旦東京進学に傾きながら、受験を前に地元の大学に志望校を変更している。

3

東京進学と地方進学を加速する要因は何か

- 模試などの結果を受けて、偏差値をモノサシにして進学先の候補を広げていくと、大学数の多い東京に目が向くようになっていく。
- 最終的に志望校を絞り込む際に、親との話し合いの中で経済的な負担を考慮することで、地元進学に傾く者が多くなっている。
- オープンキャンパスは東京・地元いずれの場合にも重要な体験となっている。
- 地元大学に関する情報収集は疎かにされる傾向がある。
- 東京の高校生でも国公立大学（理系）志望の者は地方を検討している

4

将来の就職や、結婚・子育て、さらにその先にある親の介護などをどのように考えているのか

- 地方から一旦東京の大学に流出すると、就職の際に地方を選択する者は少数で、地方に呼び戻すことは困難になる。
- 地方大学に進学した者も、就職の際は再び東京の企業を意識するようになり、流動性が高まる。
- どこで暮らすのかを、職業ではなく生活に軸を置いて考えれば、地方の方が暮らしやすいことには多くの若者が気づいている。

5

日本の人口減少や東京一極集中の問題を、どのように伝えれば、若者にとって自分事化されるのか

- 人口減少や東京一極集中の問題を一般論として扱っても、若者には響かない。
- 自分自身の生活にどのような影響が及ぶのか、を伝える視点が重要になる。
- 数字で伝えるよりは、生活のイメージがよりリアルに伝わるように（「MEETS」のような手法で）見える化することが求められている。
- 地方に暮らす人の生き方を紹介することは若者の共感を呼ぶアプローチになっているが、その際「成功者」の生き方ではなく、自分に置き換えることのできるリアルな暮らしぶりが知りたい、と若者は考えている。
- 自分にとって幸福な生き方とはどのようなことか。そのためにはどこでどのように暮らすのが良いのか。そのように考える機会が欲しい、と若者は考えている。

6

若者の自分事化へのヒントは今回グループインタビューの様な、自分の将来のことを考え、話し合うアプローチから見い出すことができるのではないか

- 日常生活の中で、自分の生き方について考える機会はなかなかないし、友人と話し合うこともない。今回のグループインタビューであらためて自分たちの地方の良さにも気づくことができた、との感想が多く聞かれた。
- 大学生からは、このような機会はできれば大学生になる前に経験しておきたかった、そうすれば大学の選択の方法が変わっていたかもしれないという声が聞かれた。高校生からもあらためて視野が広がった、という声が多く聞かれた。